日本ＳＯＤ研究会報

発行元 日本ＳＯＤ研究会 藤沢
住　所 〒154-0012
東京都世田谷区
駒沢 5-13-1-205
TEL.　03-5787-3498
http://www.sod-jpn.org/

特集 丹羽療法 治療レポート

３月 11 日に発生した、東北地方太平洋沖地震にて
被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

統合医療展 レポート

限界の西洋医療　その先の未来医療は
患者のための全体医療、統合医療

統合医療の流れは世界的 大幅な遅れをとる日本
阻むのは製薬会社と医師会

◇講演紹介◇

渥美和彦 先生
（東大名誉教授　統合医療学会理事長）
黒岩祐治 氏（元フジテレビ 報道キャスター、現国際医療福祉大学客員教授）

・・・・・・・・・・・・・・・

今年で７回目を迎えた「統合医療展」。その注目度は年々増していて、医療の新しい展開を予感させるものとなりました。そんな統合医療展で行われたセミナーの中の特別講演をご紹介します。特別講演は２日間で３名の方が行い、丹羽先生とも交流のある帯津良一先生もそのひとりでした。今回は、初日に行われ、統合医療展のオープニングを飾った講演、日本統合医療学会理事で東京大学名誉教授の渥美和彦先生。もうひとつは、元フジテレビの報道キャスターで、現在国際医療福祉大学大学院教授の黒岩祐治氏。この両氏のお話を紹介します。

片や、半世紀にも渡って西洋医学の最高峰の現場で心臓外科医として世界的にも著名な渥美先生。片やフジテレビの報道キャスターとして報道し続けた救急医療現場の報道で、ついに法律まで変え、救命士を誕生させ、数度にわたり民間放送連盟賞を受賞している黒岩氏。

今回の話では、お二人がどのようにして統合医療がこれからの医療というまでになったかといういきさつから、日本が世界に遅れをとっている現実、そして未来医療について熱く語っています。また、講演のあと、お二人とお話をさせていただいたら、お二人とも丹羽先生のことや業績、統合医療への取り組みをよくご存知で、改めての取材に快く応じてくださいました。

両氏のインタビュー記事は、６月に発行予定の※ＳＯＤ冊子VOL.３に掲載予定です。お楽しみに。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

◇渥美和彦先生のお話

最先端の西洋医療だけをやっていては患者は治らない

渥美先生の講演が始まったのは統合医療展開始すぐ、10時半からでしたが、会場は30分前にはすでに満席で、立ち見が周囲を囲む盛況ぶり。そこに登場した先生は、80歳とは思えない肌つやでさっそうと壇上にあがられました。そしてまず、最初に話されたのは、統合医療とは

「私は、これまでずっと、最先端医療をやってきました。人工心臓で世界記録を作り、50年も前にコンピューターによる電子カルテを開発し、レントゲンの画像と数値データと、記述データを一つにまとめたのです。また、日本で初めてレーザー手術もしました。それくらい医療の最先端をやってきたのです。ところが、こういう最先端の医学をやっていただけでは患者は治らない、ということに気付いたのです。その結果が統合医療です。この統合医療というのは、西洋医学が最先端医療を極めた結果、その弱点が分かって、次のステップとなる新しい医学としてあるのです。つまり、近代医学の過程だけが医学ではないんです。最先端の医療に、瞑想やヨガ、気功、鍼、もちろん健康食品も含めて世界中にあるものを取り入れながら患者中心の医療をする、それが統合医療なんです。身体だけでなく、心からも全体を診る。それから治療だけでなく予防の医学でもあるのです。みなさん、病気になった時だけ病院に行きますよね。それではだめなんです。その人がどういう環境の下で生活をしていて、どういう親の元でどういう育ち方をして、どういう食生活をしてきたか。そういうことを詳しく調べていかないと本当の病気というのは分からないし、治らない。これからはそういう患者中心の全体医療、予防医療、健康医学、そういう時代になります。これが統合医療の基本なのです」

西洋医療のルーツはアーユルベーダ、中国医学、ユナニ医学世界の３大伝統医学

「医療の歴史をたどっていくと、大昔は宗教が病を治すとされていました。けがをする、病気になる、痛みもあるけど治らない。そこで祈祷などをしていた。神への恐れがありました。その後、いまから５千年前。インド、中国、アラブイスラムに３大伝統医学が生まれました。インドのアーユルベーダ、中国の中国医学、アラブイスラムのユナニ医学。この３つが世界の３大伝統医学と言われています。実は西洋医学が生まれた元はこれらの東洋医学、アジアから始まったのです。みなさんこのことには誇りを持って下さい。これがギリシアやローマを経てヨーロッパに広がって化学と結びついたんです。それが西洋医学です。

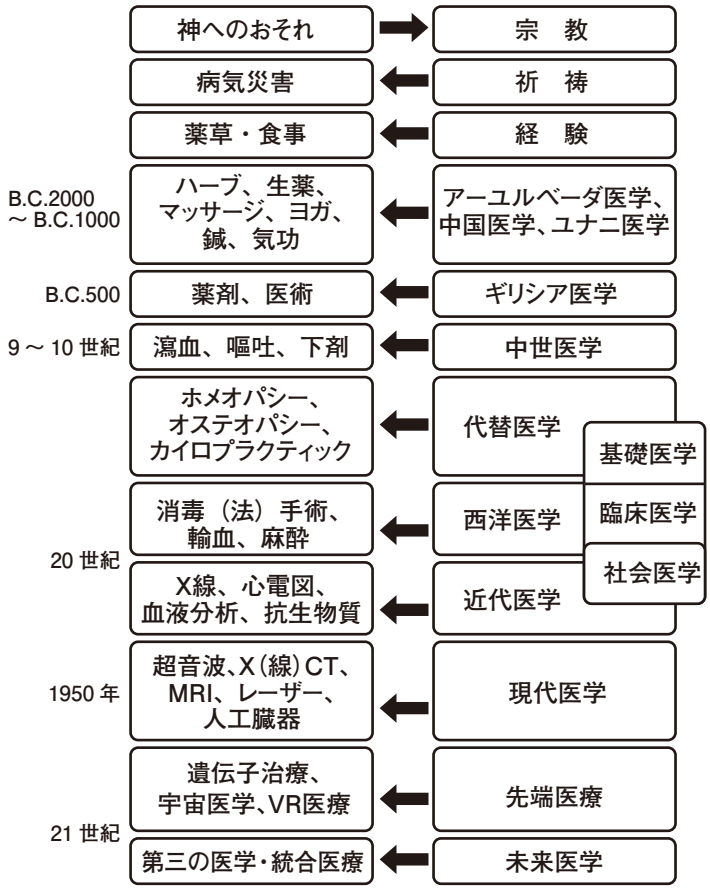
化学には３つの定義があります。ひとつは客観性。Ａ先生とＢ先生、

『統合医療がよくわかる老い方上手』
渥美和彦著　ＰＨＰ研究所

ふたりの医者が同じ人を診察して、医者の主観で診察結果が変わってはだめですよね。同じような診断が出て、同じような治療がされなければいけない。これが客観性。次に再現性。昨日の診断と今日の診断が変わらない。そして普遍性。アメリカで行った手術が日本でも行われる。この３つの化学が西洋医学と結びついて急速に発展したのです。この３つがあれば誰にでも理解できるから簡単ですよね。だから急速に世界中に広まった。西洋医学の始まりは、たかだか100年まえのことです。麻酔、消毒、輸血ができるようになったところから始まっているのです。

それが近代医学（Ｘ線、心電図、血液分析、抗生物質）になって、現代医学（超音波、ＣＴ、ＭＲＩ、レーザー、人工臓器）になって、先端医学（遺伝子治療、宇宙医学、ＶＲ＝ヴァーチャルリアリティ医療）になったんです。

医療の歴史



そしてこれからは未来医学。それが統合医療なんです。つまり統合医療というのは、五千年も前からの古い伝統があって、西洋医学という化学の過程を経て、すべてが結びついて統合医学となるのです。

近代医学というのは統計的です。例えば、たばこを１日に100本くらい吸うヘビースモーカー３万人くらいの統計をとると、３人に１人、33％の確率で肺がんになります。これは事実です。しかし、ヘビースモーカーでも肺がんにならない人が半分以上いるわけです。逆にたばこを吸わないのに肺がんになる人もいます。これは何か。それは西洋医学が例外という言葉で切り捨ててきたものです」

外科手術、放射線、抗がん剤では救えないたくさんのいのちを統合医療が救う

「がんになった患者さんは西洋医学では何をするかというと、がん治療にはゴールデンスタンダードという三つの治療法があります。まず外科の手術で病巣を取り除きます。二つ目は放射線をあてて病巣を焼きとります。三つ目は抗がん剤です。しかし、これをやっても治らない患者さんはどこへ行きますか？　たくさんいます。行くところはホスピスか在宅治療。病院からはもう用がないから出て行ってくださいと言われます。そこで患者さんはいろんな方法でなんとか生きたいと思うわけです。その方法を探します。いかさまがいのものもたくさんあります。そういうのに引っかかって大金を払わされて、やがて亡くなっていく人が実に多いのです。それではだめなんです。われわれはそういう西洋医学ではだめな人を救おうとあらゆる方法を考えています。

心理学者、看護師さん、医者、経済学者、神学者、栄養士、薬剤師、漢方の専門家などが全部集まって一人の患者さんをどのように救おうかを考える。そんな治療法を考えています。西洋医学だと医者と看護師さんと検査技師だけです」

国の方針として20年以上前から統合医療の研究が勧められている欧米諸国

「このことを研究し始めたのが20年くらい前のアメリカです。ハーバード大学の教授がアメリカの国民がどういう医療を使っているかということを調査したのです。そしたら、国民の三分の一が鍼や灸、カイロプラクティックなど西洋医学の病院では扱っていなかったものを治療に使ってことが分かったのです。いちばんが瞑想。スピリチュアリティ。次にサポート療法。３番目がハーブ、イメージ療法、指圧、ユーモア、アロマセラピーなどでした。アメリカは自分で自分を守るというセルフケアの国ですから、自分の役に立つものでなければ利用しません。日本のように健康保険制度がないから、自分の健康が危険に直面すれば、一番いい方法は何かと考える。コスト、安全面を調べて彼らは統合医療にたどりついたのです。

これは20年前のデータで、今は50％以上の国民が統合医療を利用しています。日本は残念ながら非常に遅れていて、多くても10％くらいでしょう。またアメリカの医師と統合医療の関係は、60％以上の医師が統合医療を推奨し、そのうち47％の医師が実際に治療に使用しています。このデータも１９９４年のものですから今はもっと多く、ほとんどの医師が推奨していると思われます。また、大学でも100を超すほとんどの医学大学に統合医療のコースができています。日本は残念ながら10本の指で数えられるほどです。このように考えると、次世代の医療に危機感を持たざるを得ないのが日本の現状です。

アメリカのＮＹに世界一のがんの研究所があります。そこでは国から統合医療に毎年500億円くらいの研究費が出ています。日本はやっと最近、１億円の予算が出た。欧米では統合医療の歴史は古く、アロマセラピーやホメオパシーなどは医療のひとつとしてずっと認められてきています」

統合医療は国家予算の3割占める医療費を節約できる

「アメリカや欧米では国民の多様なニーズがあって、西洋医学だけではなくほかの方法でやってほしいという患者さんが多く、そのニーズに答えているのです。実際、体質的にモルヒネが効かない人が鍼で痛みをとって手術をすることもあるのです。となると、副作用のない鍼のほうがいい。残念ながら日本では鍼はごく一部の人にしか理解されていません。これから日本はかつて経験したことのない高齢化社会がやってきます。同時に医療費はどんどんかさんでいきます。国の予算が医療費だけで50兆

代替医療の分類

1）医療の実践における代替システム
- 中国医療
- 鍼
- アーユルベーダ
- ユナニ医学
- チベット医学
- ホメオパシー医学
- 自然療法
- 環境医学

2）食事・栄養・ライフスタイルの改善
- ライフスタイルの改善
- 食事療法
- 栄養補強剤
- メガビタミン
- マクロビオテックス
- 健康食品・栄養補強剤

3）薬理学的・生理学的療法
- 抗酸化剤
- 細胞療法
- キレーション療法
- 代替治療
- 酸素化剤（オゾン、バーオキサイド）

4）ハーブ医学
- イチョウの葉 (Ginkgo Biloba)
- 西洋オトギリソウ (St.John’s Wort)
- ムラサキバレンギク (Echinacea)
- 朝鮮ニンジン (Asian ginseng)
- ニンニク (Garlic)
- ノコギリヤシ (Saw Palmetto)
- カバカバ (Kava Kava)
- ショウガの根 (Ginger Rhizome)

5）用手療法
- 指圧
- マッサージ
- カイロプラクティック医学
- オステオパシー
- リフレクソロジー
- 生体場治療
- タッチ療法

6）生体磁気の応用
- 電磁場
- 電気刺激と磁気神経刺激装置
- 電気的はり
- ブルー光治療と人工照射

7）心身のコントロール
- 精神療法
- 催眠療法
- バイオフィードバック
- カウンセリング
- リラクゼーション法
- がんサポートグループ
- 瞑想
- ヨガ
- 祈祷療法
- 誘導イメージ療法
- 芸術療法
- 音楽療法
- ダンス療法
- ユーモア療法

円と言っています。それをお年寄りだけ統合医療を使って治療すると、我々の試算では13％の医療費が節約できるんです。

ところが今の日本ではこれができない。どうしてかというと、二つの大きな反対勢力があるからです。ひとつは製薬会社。ここは患者が増えて化学薬品の薬を使ってくれないと儲からない。次に医者。我々の考えは薬を減らして医者を減らすことなんです。理想は医者のいらない医療なんです。みなさんが自分たちで本当の知識を持って食事や健康管理ができれば医者なんか必要なくなるんです。アメリカでもヨーロッパでも、この二つの勢力が阻んでいます。しかし日本と違うのは、統合医療に対する国民のニーズです」

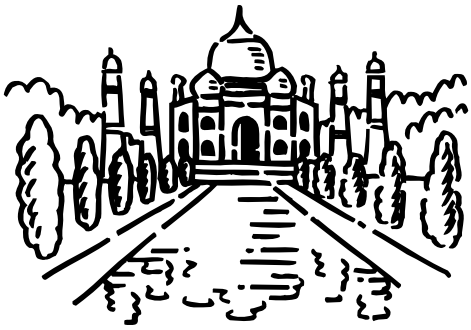
渥美和彦先生と黒岩祐治氏

これからはインドと中国が世界の医療をリードする

「これからの医療は治療から予防へと向かっています。もう治療の時代は終わりつつあるのです。いろんな国が統合医療を国策としています。私は最近、インドや中国、韓国に行ってきました。これらの国は、国をあげて統合医療を応援しています。日本は遅れているんです。どうしてかというと、これまでの政府が悪かったんです。政治家が悪かったんです。民主党になってようやく動き出したんです。

中国、インドにも行ってきましたが、この二国はすごいです。二国は今や世界の大国です。面積も大きいし、人口も多い。両国とも10億人ずついます。

人間の欲求というのはまず食べることがいちばんにきます。次にくるのはラクをしたいから車を買いたい。３番目が住家を持ちたい。４番目が健康なんです。病気になりたくない、長生きしたい。そのために医療を良くしたい。しかし、この二つの国は人口が多いから近代医療をするにも医者も薬も足りないんです。医者の教育には20年かかります。それを待っているわけにはいかない。西洋医学をインドや中国全土でやるには、今、とても時間とお金と人材が足りないんです。そこでどうすればいいかというと、中国には中国医療、インドにはアーユルベーダやヨガがあります。これらを含めた伝統医療と西洋医学を合わせながら、安くわかりやすい医療で国民を助けようと国をあげて応援しているのです。ということは、おそらく、この経済成長が著しい中国とインドという二つの世界の大国が、これからの世界の医療を変えると思いますよ。日本は本当にもっとがんばらないと置いて行かれます」



数年後には統合医療からノーベル賞が出る

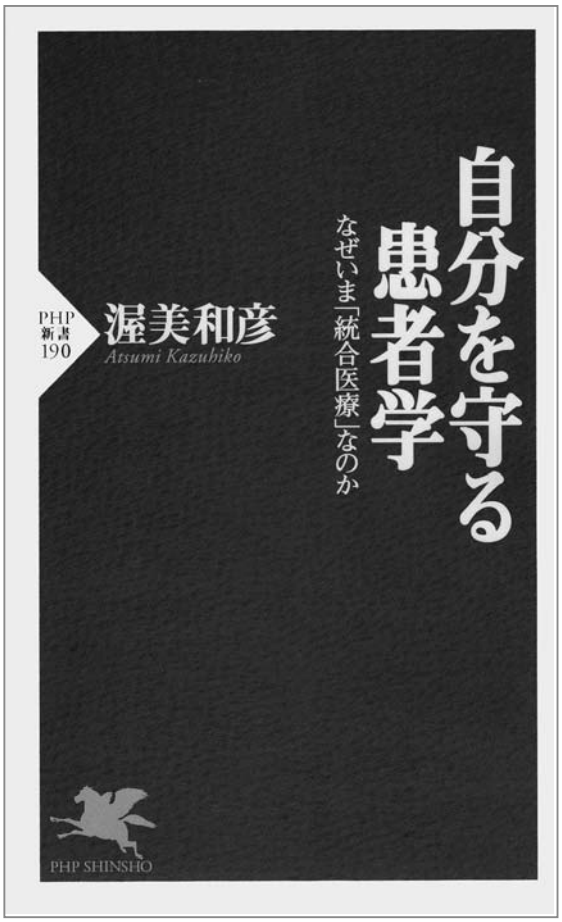
「私たちは国民のために統合医療をやりたいんです。西洋医学では治せないものがたくさんあるのです。例えば、がんの末期、どうにもならない。そのためには政府を動かし、人材の教育、いろいろな療法との連携、そして国立の統合医療の病院を作ること。そしてなによ

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎０１２０(７３１)１７５
もしくは
日本ＳＯＤ研究会
☎０３(５７８７)３４９８
まで　お電話ください。

りも国民の理解。みなさん、いま、医療が崩壊しているとか、荒廃しているとか言われますが、決してそうではないんです。先端医療では日本は非常に優れているのです。しかし、その道だけがすべてではないということに気付くべきなのです。おそらく数年後には統合医療からノーベル賞が出ますよ。

僕らはまず、センターを作り、ガイドラインを作らなければいけないと思っています。ちまたにあふれている健康食品の評価、ガイドライン。音楽療法が効くといっても、その療法士に資格がない。カイロもアメリカではカイロの大学まであるのに日本では医療と認められていない。アロマテラピーも医師会が医療ではないと反対している。おかしいでしょ。我々はこれらの資格をどんどん変えていって、より良い人材を教育していきたいんです。そして、インド、中国、韓国に留学しても学んできてほしいんです。

みなさんはもう一度、統合医療は自分たちの健康のためにあるんだということを認識していただきたい」



『自分を守る患者学』
渥美和彦著　ＰＨＰ新書

◇黒岩祐治氏のお話

がん細胞と向き合い命と向き合わない日本の医療の現状

渥美先生の講演に続いては元フジテレビの報道キャスターで現在ジャーナリストであり、国際医療福祉大学の客員教授でもある黒岩祐治氏。テレビで良く拝見していた凛としたそれでいて親しみやすい姿そのままに、良く通る声で分かりやすく話し始めました。

統合医療という前に、西洋医学だけでいいのかという疑問を持ち始めたのはご自身の持病である腰痛からだそうです。病院に行っても安静にしてくださいとしか言われず、湿布薬が処方されるだけ。カイロ、接骨院、鍼、ありとあらゆる民間療法を回り、ある時、アメリカでカイロの資格を持った先生に出会い、たった数分の処置でギックリ腰が治ったそうです。そのことから西洋医学の限界を認識し始めました。

そして、今の日本の西洋医学は「命」に向き合っていないのでは。「病気」に向き合っているだけではないか。

という思いを実感したのが、同じフジテレビの人気アナウンサーだった逸見政孝氏ががんで亡くなられたときでした。

先輩アナウンサー逸見政孝さんの死が教えてくれたこと

「逸見さんが記者会見で〝私の病気はがんです。がんと闘ってここに帰ってきます〟とおっしゃって、そのあと報道フロアにあいさつにいらして、握手をしたのですが、そのときの痩せ細った手の弱い感触を忘れられません。と同時に、あんなにか細いのに手術をすると聞き、驚きました。しかし、執刀医は、当時、がんにかけてはゴッドハンドと言われていた権威中の権威でした。逸見さんはその先生にすべてを任せたのです。

そのときの二人のやりとりの記

録があります。これも見事なものです。先生、嘘は言っていませんよ、嘘は。逸見さんが先生に「この手術をすれば、私のがんは治りますか？」と聞いたんです。すると先生は「それは神のみぞ知る。でも、私は、逸見さんが任せると言ってくださったら、今までのすべての知識と経験をそこに集結して、全力を尽くします」と答えました。逸見さんはその言葉にほだされたんですね。世界の権威と言われている先生が自分のために全力を尽くしてくれると。その言葉に思わず「じゃあ、先生、よろしくお願いします。残りの人生は任せます」と。そうして手術は行われました。手術が終わった直後、フジテレビの当時の幹部とドクターの会食会がありました。私はその様子を後で聞きました。ドクターは得意満面だったそうです。「手術は完全にうまくいきました。きれいにがんの病巣を全部切り取りました。わっはっは！」と高笑いしていたそうです。すさまじい量の病巣を切り取ったそうで、それを聞いていた幹部たちは首をかしげたそうです。そんなに切って大丈夫なのかと。結果的に逸見さんは、その後、一切回復することなく、そのまま亡くなられました。

　これが西洋医学の先端にあり、権威と言われた人の処置だったんです。私は何かおかしいんじゃないかと、納得ができませんでした。でも、そのドクターを責める気にはなれませんでした。彼はゴッドハンドと呼ばれ、多くの症例を扱ってきた、信頼の厚いドクターです。何によって成功を治めたか、それはがんを切ることでなんです。がんをきれいに切る技術をどんどん磨いて、彼はそれだけの地位を得たわけです。ですから、患部を切ることに人生を賭けていました。がんを切る技術には長けていました。でも、彼は何かを見失っているのではないでしょうか。彼は逸見さんの一体何を見ていたのでしょうか。彼は逸見さんのがん細胞しか見ていなかったのでは、という思いが消えませんでした。

黒岩祐治氏

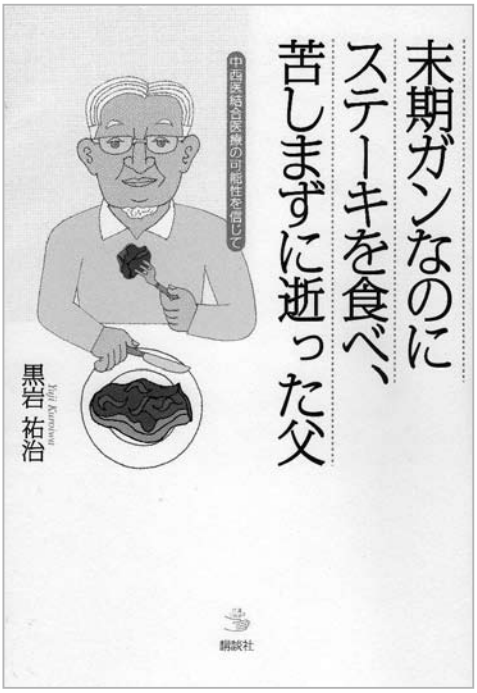
　がん細胞と向き合うことも大事かもしれません。ですが、人間の命もそこにはあるんですね。がんは切り取った、でも、死にました、というのは正しい医療といえるのでしょうか。私はその頃から、ひらがなで書いた「いのち」、このことばをずーっと大事にするようになりました。「いのちに医療は向き合っているのか」について悩みました。病気に向き合っているだけではないのか、と思いました。それから「いのちに向き合う医療は何なのか」をずっと探していました。そのときに私の父親ががんになりました。２００５年のことです。肝臓がんになりました」

余命1ヵ月といわれた父が生きた2年半の経験が自分を変えた

**　ここから、黒岩氏のお父様のがん闘病のお話になるのですが、この話は、改めて取材をして、※ＳＯＤ冊子VOL.３（６月発行予定）に掲載する予定です。講演では、お父様の看病の経験から、統合医療の活動へと向かい、統合医療の現状や、今の活動のことなどを話してくれました。**

「父は、余命1か月といわれてから（統合医療のおかげで）とっても生活の質がいい、家族に包まれた2年半を過ごすことができました。この2年半は貴重な、貴重な2年半でしたね。うちの母親は父親がこんなに長く生きるとは思わなかったと言っていました。こういうことが実現できる、これこそが私が求めていた「いのちと向き合う医療」でした。これをなんとか広めたい、それはおそらく、父から与えられた宿題だろう、私の使命、ミッションだと思いまし

た。その思いを『末期ガンなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父』という本にして一昨年の9月に出版しました。翌10月に、その本を読んだ慶応大学の漢方医学センター長・准教授・渡辺（賢治）先生が飛んできました。「黒岩さん、今度政府の研究費が降りてきて、ある研究会がスタートするんですよ。その研究会のタイトルが『漢方と鍼灸を活用した新しい日本型医療の創生』。検討会が始まるんです。黒岩さん、その班長をやってください」と。私以外はみんな医学者のなか、私でいいと言われ、座長として入りました。



『末期がんなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父』　黒岩祐治著　講談社

つまり、なんでこんな話で研究費が降りてきたかというと、それは、民主党のマニュフェストなんです。民主党のマニュフェストに統合医療の推進というのが入っていたんです。これがあったからそういう研究会もスタートしたんです。民主党もちゃんといいことやっているんです」

ゲノム解析で漢方にエビデンスの可能性が

「研究会ではおもしろいことがいろいろ出てきましたね。どうやって西洋医学と漢方を融合していこうか、といったときに、漢方を理解する西洋医学の先生もいるけど、全く、理解しない先生もいます。「いかがわしい」「エビデンスがあるのか」「効く証拠があるのか」というんです。漢方は効く証拠、エビデンスというものを見せにくいです。なぜかというとエビデンスを取りたくても取れないから。西洋医学ではこの薬は効きますよ、というのはどういうことかというと、同じような症状の人を100人なら100人集めます。うち半分には新薬を使います。残り半分には偽薬を使います。それで変化を見て、偽薬よりちょっと効果があるというと、その薬は効きます、となるのですね。これが西洋医学的なエビデンスの取り方です。ところが漢方はその手法は使えないんです。なぜならば（同じ病でも）みんな一人ひとり違う処方をするからです。

漢方の大きな考え方の中には「証（しょう）」というのがあります。「証」とは証明の証です。証というのは人間の体質ですね。汗っかきの人もいれば、寒がりな人もいる、よく笑う人もいれば、むっつりしている人もいる。西洋医学ではそういう一人ひとりのちがいというのは全部無視します。西洋医学では男と女の差もつけてない。よく考えたらおかしいことですよね。漢方は「証」に合わせて処方していくんです。さらに使う薬がまた生薬なので、品質が必ずしも均一ではない。西洋医学で使う薬は化学物質なので同じものを作りやすい。だからデータが取りやすい。ところが、生薬はワインと同じ。今年のワインはおいしい、今年のワインはすっぱい、いろいろあるじゃないですか。生薬とはそういうものですから、品質は一定じゃない。だからデータを分析できない。だからエビデンスはとれない、というだけなんです。

西洋医学では分からないものだから「いかがわしい」で切り捨てる。では、どうして漢方は効いているのか、そこに目は向けられないのか？　ということで、本当に融合させるためには、なんとか漢方でエビデンスがとれないか、といったときに出てきたのが、ゲノム解析です。

ゲノム解析というのは要するに遺伝子解析です。西洋医学の最先端で今何をやっているかというと、それぞれ個々の遺伝子情報から一

人ひとりに的確に合わせた薬を使っていくことです。でも考えてみたら、漢方は昔から個別対応でした。これを融合させ、漢方のデータもとれないのか、といったら、ゲノム解析の最先端の人はできるといいました。「それはスーパーコンピュータ」を使うんです。だからスーパーコンピュータは1番じゃなきゃだめなんです、2番じゃだめなんです（笑）。スーパーコンピュータに一人ひとりの知っている情報を全部入れるんです。それをすごい速度で解析するんですね。すると個別化のエビデンスが出るんです。東大の最先端のスーパーコンピュータの教授がいうんです。やっぱりそうすると、これから目指すべき最先端の医療は個別化医療かなと。これこそがまさに東洋医学と西洋医学の融合、新しい形だな、そこを目指そうということになりました。不思議なことにね、われわれがもともと考えていたのは、漢方をどうやって西洋医学に合わせるかでした。それも大事だけれども、漢方の考え方に西洋医学を合わせることこそがまさに融合、われわれが目指すべき新しい医療ではないか、と。そうするといろいろなことが見えてきました」

中国が漢方の権利をすべて押さえる そんなときがいずれやってくる

「例えば、生薬というのは8割以上中国から輸入しているんです。高齢社会になっていくと、西洋医学では届かないところ、限界が出てくるんです。西洋医学は高齢社会に向いていないんです。薬でがんがんやっつけていく、それではいのちが助からない。だから、そういう中で漢方は世界的に優位なんです。それを中国はしっかり押さえようとしている。生薬市場は全部自分たちが独占的な権利を有するわけだから。そうすると日本が輸入する価格がどーんと高くなる可能性があります。では、どうすればいいのか。われわれが提言したのが生薬を国で作ろう、ということです。休耕田で生薬を栽培すれば、農業の再生になる。畑で薬ができる。外国的に戦略的に輸出する商品になるかもしれない。農業再生にもなるし、地域再生にもつながる」

西洋化で伝統医学を切り捨ててきた日本 伝統医学に医師の国家資格がある中国、韓国

「そして食、これもやっぱり大きなテーマですね。これからは食の機能効能ではないかと思っています。ビタミンＡとかＣとかＥ、栄養の話とはちょっと違います。これは食の機能効能を整理して、食によって未病を治していく、というような国民運動を目指していくことが、社会保険の切り札になるんじゃないのか、と思うんですね。

漢方というのは、生活の中の養生医学なんです。われわれは具合が悪くなると、すぐ薬局で薬を買ったり、病院に行ったりしますね。でも江戸時代はどうだったんですか?そんな病院はなかったでしょ。ドクターは漢方の先生だったでしょ。みんな生活の中で防衛していたんです。生活の中で医食同源が全部あったんですよ。それは日本にもともとあった医学だったんです。中国からやってきた漢方の元祖はずーっと根付いて伝統医学としてあったんですよ。

ところが明治になって、明治政府はかつての伝統医療に権利を与えなかった。医師国家資格というのは西洋医学にしか与えなかった。それが日本の近代化なんです。伝統を捨ててしまったんです。細々と漢方が生きながらえて残っているだけなんです。中国も韓国も、西洋医学があとからやってきた。日本と同じことが起こりました。でも対応が違い、伝統医学は残ったんです。ですから中国、韓国では医師の国家資格は西洋医学と漢方の2つあります。それを今どうやって融合させていこうかということを考えている、そういう時代なんです。一方、日本は漢方を捨ててしまった。結果、今、西洋医学の限界まで来ているんです。江戸時代、西洋医学になる前の時代

にあったいろんな知恵を私たちは忘れていませんか？　それは、おばあちゃんの知恵袋みたいなものです。旬の物をたべなさい、精をつけなさい、こういう言葉は、全部、そういった歴史からきたものでしょう。食の中から改善する、これができることが日本にとって一番いいことでしょう」

高齢化社会だからこそ統合医療が必要

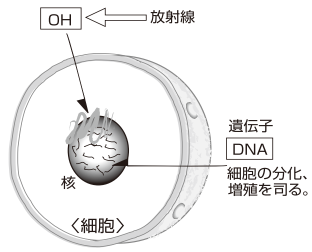
「この民主党政権、いつまで続けられるか分かりませんが、社会保障のあり方を考えようと言っています。そういうことを考えるのはとっても大事だけれども、消費税をどこまで上げるか、という話しか伝わってこない。社会保障のあり方を話すときに、どうして医療の質のことを話さないんでしょう？　おかしいと思いませんか？　一番大事なことは超高齢社会になり、老人になったら病気にならないことです。これから団塊世代がどんどん老人になっていきます。そうしたらどれだけ現役世代が負担しなければならないのか、消費税を上げなければならないのか。これを解決する一番大切なことはなんですか。それは未病を治すことです。つまり病気にならないことを目指すこと。みんなが未病を治し、健やかに気が高まった状態で長寿を全うしていく。最後、ピンピンコロリで逝く。そうなれば、医療費がかからないじゃないですか。そのために大事なのは医食同源の食ですよ。食は、食事ですから、特別にお金がかからないでしょう。そういうことで日本の社会保障は守られていく。一番、大事なことですよ。

　統合医療にもいろんなものがある。一度に混ぜようというと難しいものがあります。まずは漢方と西洋医学を融合させよう。そのうえで、いのちに向き合う医療をみんなで作っていく、それが重要だと思っています」

※ＳＯＤ冊子VOL.３ご希望の方は
丹羽メディカル研究所まで
お問い合わせください。
☎０１２０（７３１）１７５

放射線と活性酸素の関係について

　原子力発電所の事故により、放射線の放出が懸念されています。放射線がヒトの身体や健康に及ぼす影響について、丹羽先生の研究によれば、細胞の核の遺伝子に作用して、ＯＨ・（ハイドロキシラディカル）という、不安定で他の物質と結合しやすい活性酸素をつくり、遺伝子を形成する核酸たんぱくのＤＮＡを溶かすために、細胞が破壊されることが明らかになっています。詳細は講談社刊講談社＋α新書丹羽靭負著**『がん治療「究極の選択」』**（p17 ～）をご覧ください。



　また、丹羽先生監修の最新ＤＶＤ**『安心の医療 本当の健康』**のなかでも、活性酸素の免疫機能と発がんへの影響、活性酸素の過剰な働きを抑えるＳＯＤ酵素について、映像を利用してわかりやすく説明されています。

　ＤＶＤにつきましては丹羽メディカル研究所までお問合せください。

丹羽先生の最新ＤＶＤ

ＳＯＤ様作用食品体験者の声をお聞かせ下さい。

　難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒154-0012 東京都 世田谷区
駒沢 5－13－1－205
日本ＳＯＤ研究会　藤沢宛
TEL 03－5787－3498
までご一報ください。